

良き訓育の手段

17 世紀ヴァルハウゼン 「正しい規律・訓練」＝「良い訓育」(p175)

- その権力(規律・訓練を旨とする権力)は、流動的で雑然として無駄な多量の身体ならびに力を、多様性のある個別的な諸要素一切離された小さい独房、有機的な自立性、段階的形成を中心にした同一性と持続性、線分状の組み合わせーとして《訓育を課す》

規律・訓練的な権力の成功の道具…①階層秩序的な監視 ②規格化を行う制裁 ③試験

階層秩序的な監視 (p175-p181)

規律・訓練の行使は、視線の作用によって強制を加える仕組みを前提としている p175

○監視のための建築 p176

多種多様で交錯した監視に関する技術が存在ー《監視施設》

- (ex) 軍の野営地…全権力が厳密な監視の働きだけで行使されるだろうし、しかも各々の視線は権力の全般的作用の1つの断片となるだろう。

↳

有機的に配置され細部に及んだ内的な取り締まりを可能にするために作られる建築物の問題体系が展開 (⇔見てもらうため or 外部空間の監視のための建築) P177

建築物＝個々人の変換のための作用素となる

- その建築物に収容される人々への作用であり、彼らの行為に対する支配であり、彼らにまで権力の効果を及ぼし、彼らを調べ上げ、彼らを変化させる

(ex) 医療的行為の道具としての「病院＝建物」

訓育のひとつの作用素としての「学校＝建物」

規律・訓練の制度 [=施設] は、人間の行為を調べる顕微鏡として機能する取り締まり装置を広め、その制度によって実現された精密で分析的な区分は、観察・記録・訓育の仕掛けを形作った。P178

○ピラミッド型の監視

“円形型の監視”

規律・訓練の装置が完璧であれば、唯一の視点だけで何もかもをいつまでも見ることを可能にするだろう

《中心点》＝何も見落とさない完璧な目&すべての視線が向けられる中心

But 規律・訓練的な監視はいくつかの中継を必要としてきた

“ピラミッド型の監視” (階層秩序的な監視) … 2つの要請に込んでいる

①隙間のない網目を形成→いくつもの段階を多様化できる&取り締まるべき全平面にそれを配分できる可能性

②秘密が守られる→規律・訓練を課すべき活動の障害にならず、生み出せる効果を増す1つの機能として規律・訓練の仕掛けに統合できる

(ex)大規模工場での職員の監視・委員会への報告を行う監督者

学校の生徒の中から選ばれる「かかり」

- ・監視の運用＝係り合いの網目の運用（上部→下部、下部→上部、横手への視線）であり、その網目が総体を保持させ、相互に支えあう権力的な影響をすみずみまで及ぼす。
- ・この階層秩序化された監視のおかげで、規律・訓練の権力はそれが行使される装置と内側から結びつく《統合された》1つの組織になる。

→階層的な視線の網目によって、権力の影響を全体に行き届かせることができ、その網目全体で規律・訓練的な権力を成す。

規格化を行う制裁 (p181-p187)

[1]

- ・規律・訓練的なすべての組織の中心では、ささやかながら刑罰の機構が機能する p182
- ・軽い体罰、没収、加辱など一連の精密な手段が処罰として用いられる
 - ◇通常、法律では裁かれない些細な行為を処罰可能にし、規律・訓練の装置の有する些細な要素にも処罰機能を付与する。

(ex)「仕事場へ入る時は、職員は互いに会釈すべし」

[2]

- ・規律・訓練上の刑罰の対象になるものは規則などへの違反、規則に妥当しない一切の事柄、規則を離れる一切の事柄であり、逸脱である。 p182
 - 「不適合」が裁かれる。
- ・規律・訓練的な罰が尊重すべき秩序は折衷的。人為的＝自然的秩序

[3]

- ・規律・訓練的な罰は、逸脱をなくすという機能を持ち、その罰は矯正感化的でなければならない
- ・大抵の場合規律・訓練的な処罰は義務自体と異種同形、規則違反への報復というより、義務のくり返し、義務の反覆の強要 p183

→罰＝訓練

[4]

- ・規律・訓練における処罰は恩恵＝制裁の二重の体系の一要素にほかならない。しかもこの体系こそが訓育および矯正の過程のなかで作用的になる p184
 - ◇報償と罰を組み合わせることで、規律・訓練的な刑罰制度に特有な操作が可能。
- ①善と悪の2つの相反する価値に基づいた、行為及び成績の評価
- ②評定の数量化・それぞれの者に関する処罰の収支計算を入手する
 - それを基に個々人（性質・能力・水準）を評価し差異を与え、階層秩序化する

[5]

- ・ 序列や段階にもとづく〔個々人の〕配分には二重の役割が含まれる
 - ①逸脱を明示し、性質と能力と適性を階層秩序化すること
 - ②懲罰を加え褒賞を与えること p185
- ・ 規律・訓練は序列や地位を入手可能にしつつ、昇進・進級で報賞を授け、降格・地位の剥奪でもって処罰する。
 - ↳ 序列はそれ自体が褒賞もしくは処罰 p185
- ・ 規律・訓練的な刑罰制度は個々人を比較、差別化、階層秩序化、同質化、排除する
 - = 個々人を規格化する
- ・ 監視と同様に、規格化は古典主義時代の終わりにおける権力面の道具となる p187
「規格化を行う権力は等質性を強制するが、多面それは逸脱を測定したり水準を期待したり特性を定めたり、差異を相互に調整しつつ有益にしたり可能にすることで、個別化を行う。」

試験 (p188-195)

- ・ 監視を行う階層秩序の諸技術と規格化を行う制裁の諸技術とを結び合わせる試験 p188
- ・ ある可視性を通して個々人は差異をつけられ、処罰される
 - ← 試験がその可視性を個々人に対して設定する
- ・ 試験は客体として知覚される人々の強制服従と、服従を強制される人々の客体化を表す
(試験の例)病院での診断・検査《エグザマン》、中断のない試験装置＝学校

[1]

試験は権力の行使にあたって可視性という経済策を転倒させる…いわば、客体化の儀式 p190

↳ 規律・訓練的な権力は…

自分を不可視にすることで自らを行使

自分が服従させる当の相手の者には可視性の義務の原則を強制

↳ 常に見られている可能性があることによって、個人の服従強制の状態を保つ

従来の権力 自分＝可視 被権力者＝不可視 (ex)叙任式、戴冠式

規律・訓練的権力 自分＝不可視 被権力者＝可視 (ex)観兵式

[2]

「試験はまた個人性を記録文書の分野の対象にする。」 p192

→ こうして得られた個人別の記録を累積的な体系の中に統合

- ・ 診断・検査 (エグザマン＝試験) は付属的にもつこうした書記装置のおかげで、関連する二つの可能性をきりひらく。 P193

① 記述可能で分析可能な客体として個人を組立てうる可能性

②比較中心の或る体系を組立てる可能性

➡分類したり、種別を形作ったり、平均を明確化したり、規格を定めることを可能にする
〔3〕

・試験は、記録作成のすべての技術に守られ助けられることで、それぞれの個人を一つの
《事例》に仕立てる p194

《事例》…記述され評価され測定され他の個人と比較され、しかも個人性じたいにおいて
そうされうるような個人。また、訓育されるべき、分類されるべき、規格化されるべき、
排除されるべき等々の個人をもさす。

・試験…下層社会の一般大衆まで個人性の記述を可能にするすることで、個人性の記述を
1つの取締手段・支配方式として機能させる。

⇔以前、個人性の記述＝英雄化・特権的事態

「最後に試験は、個人を権力の成果および客体として、知の成果および客体として構成す
る上述の諸方式の中心に位置している。試験こそが、階層秩序的な監視と、規格化を行う
制裁とを結びつけることで、配分や分類や力および時間の最大限の抽出や段階的形成によ
る連続的な累積や適性の最もふさわしい組立てなどの、大がかりな規律・訓練的な機能を
確保する。」 p195

*

・規律・訓練は個人化にかんする政治的な軸の上下転倒をなし・個人化は《下降方向》 p195

➡権力が匿名的・機能的になるにつれて、監視・監察・《規格》の枠による比較

・《逸脱》によって、権力が行使される相手は明確に個人化される。

「大人より子供が、健康人より病者が、普通人より犯罪者・狂人が、よりいっそう個人化
される。」

・「分析の学であれ実践の学であれ《心・精神》という語源をもつすべての学問は自分の立
場を、個人化の諸方式のこうした歴史上の反転の中に持っている。」 p196

➡規律・訓練の権力の諸方式によって個人が明確化されることによって、
人間に関する諸科学(精神医学・心理学 etc)が存立可能になる。

「なるほど個人というものは、社会の《観念上の》表象の虚構的な原子であるにちがいな
いが、しかしそれは《規律・訓練》と名付けられる権力の例の種別的な技術論によって作
り出される1つの現実でもあるのである。」

➡社会の構成要素である個人は、規律・訓練の権力の技術によって組み立てられる。

権力は、排除・抑制などの否定的な効果をなすというより、客体の領域を生み出し
ているとみるべき。＜権力の生み出しの仕事＞